日本の古絵画を素材としたワークショップの実践について

—大学・美術館・学校・街の連携—

菊屋　吉生

A Practical Study of Workshops Using Japanese Old Paintings
— Cooperation between University, Museum, School, and Town —

KIKUYA Yoshio
(Received December 2, 2002)

キーワード：古美術　絵画　鑑賞　ワークショップ　美術館教育

はじめに

山口市では、学園都市としての特色を生かそうという目的のもと、大学と街との有機的なつながりを新たに構築することを模索する「山口学園都市フォーラム」が、山口商工会議所の主催によって平成５年度から活動を開始している。そしてこの活動の延長として平成９年度からは、その実験的な試みとして、「山口・まち・大学」が立ち上げられた。ここではまず、街と大学との共創をめざす創造ゼミ分科会と、街と大学とのつながり方の整理から生まれる提言活動をめざす学園都市づくり分科会のふたつの部会が設けられた。とくに前者の創造ゼミ分科会では、さらにファッション、アート、食、情報の４つの分科会に分けられ、ゼミの開催やアンケート調査などを行い、３年間の計画で各大学の教官、学生と一般市民が合同参加できるゼミ、講演、ディスカッション、ワークショップなどを開催することとなった。(1)

筆者は、この「山口・まち・大学」の平成10年度創造ゼミのアート分科会に参加することとなり、その企画案を提出することとなった。そこで、日頃から大学、学校、一般市民、それと社会教育施設の連携のあり方に興味を抱く者として、これらをうまくリンクした美術に関連したワークショップの実施が工夫できないものかと思案した。

折りしも山口県立美術館で、平成10年度の秋に特別企画展が計画されていた矢先であり、これが室町時代の仏教絵画に焦点をあてた「禅寺の絵師たち—明兆、霊彩、赤脚子—」展というものであることを知っていた筆者は、この展覧会に関連したイベントとして、このワークショップを入れ込んでもらうことを構想した。

近年日本各地の美術館、博物館では、美術館・博物館教育の一環として、展覧会に付随するワークショップの開催が盛んになってきている。ところがとくに美術館に関しては、その収集や展覧会活動が近・現代美術を対象とする施設が多い関係からか、それらで開催されるワークショップも、どうやら西洋美術や近・現代美術を題材としたものが中心となっているように思える。こうした日本の古絵画を題材としたワークショップは、まだけっして実例も多くなく(2)、しかもその企画を大学の教官や学生が立案して実施した例を筆者は

知らない。このような状況をふまえた上で、筆者はあえて平成10年度山口大学教育学部大学院の後期授業（美術史特論演習）の一環として、受講の大学院生に山口県立美術館での特別企画展出品の古絵画を題材としながら、その受講対象を小・中学生としたワークショップを計画させた。

この小論では、そのきわめて実験的な試みについての経過と内容を報告し、そこで生じた問題点や留意点を整理しながら、日本の古美術（古絵画）を題材としたワークショップのあり方、ならびに大学、社会教育施設、学校、街との連携について考察を加えてみたい。

1　ワークショップの概要計画

平成10年９月における大学院の後期授業の最初に、まず実施予定のワークショップのおおまかなアウトラインを受講の院生に示さなければならないため、筆者は一応ワークショップ実施の計画案として以下の３点を学生たちに提示した。なおこの授業（美術史特論演習）の受講学生は、全部で７名（うち現職派遣２名）であり、全員が美術教育専修の大学院１年生であった。

〈ワークショップ実施計画案〉

題材：「禅寺の絵師たち―明兆、霊彩、赤脚子―」展

（於　山口県立美術館、平成10年10月23日㈮～11月23日㈷開催予定）

①受講対象　小・中学生

②目的・意図

○鑑賞と表現

一般的にとっつきにくいと考えられがちな日本の古絵画（今回はとくに水墨画、仏画）をじっくり鑑賞するきっかけづくりをし、さらに自らによって水墨画の表現の実践をした後、できればそれらを掛幅に仕立て上げ、日本の水墨表現や伝統的な鑑賞形式に対する理解を促す。

○日本の古美術への関心の喚起

日本の古絵画に関する基本的な知識を得てもらうとともに、それらが描かれた目的、描かれ方、さらにはその材料のちがいなども、わかりやすく解説し理解してもらう。

③構成・内容

○セルフガイド

セルフガイドを学生で作成し、それを使用した鑑賞体験学習（解説は担当の学芸員に依頼）。

○実技講座

墨と筆を使った実技講座の実施。できればそれらの作品の簡易な表装を試みる。（講師は水墨画を描ける画家、簡易表装を指導できる表具師に依頼）

この計画案に対して、学生たちからは率直な懸念が表明された。まずセルフガイドについては、実例として筆者が収集してきた全国各美術館、博物館のセルフガイドを、内容は雑多であったが、学生たちにできるだけたくさん提供して見せた。学生たちは実に興味深くそれらを見たが、その一方で一様にそうしたものを自分たちが果たして作れるのだろうかという不安を抱いたようだった。なかには、こうしたセルフガイドは、全て美術館・博物館の専門職が作ったもので、自分たちのような日本の古美術に対する専門知識をもたない

者には、作成は無理だといいきる学生もいた。またこうした鑑賞も実技も盛り込んだ内容が、果たして１日で終えられるのか、２日にまたがるのか。さらにそれら材料の調達の問題などに対する不安も意見として出た。

たしかに彼らと同じような大学生、あるいは大学院生が作成したというセルフガイドの実例を見せることができなかったため[3]、そのような不安が生じたことは当然のことではあった。当の指導教官である筆者自身も、こうした試みは全く初めての経験であり、果たしてうまく事が運ぶかどうかは正直のところ全くわからなかった。ただ筆者が、この試みがきわめて実験的なものであること、失敗や問題が生じることも当然想定されるが、それも学びの場であり、そこでの対処のあり方も学習であることを説明したところ、ともかく成功、不成功を恐れずにトライしてみようということとなった。しかしこの準備や実行における具体的な仕事量が想定されにくい状況下にあって、日本の古美術に関しては初心者ばかりとはいえ当時７名も大学院１年生が在籍していたことは心強い限りであった。

実際に計画案を検討する段階で、①の受講対象では基本を小・中学生にするものの、小学校低学年の参加も考慮した時、やはり父兄の補助が必要という観点から、小学生は保護者同伴とすることにした。また③の実技講座では、水墨画の実技を指導する画家の依頼について、予算の関係（これは山口商工会議所が所管）もあって人選がむずかしく、けっきょく現職派遣である院生のひとり（菅野雅人氏）が、すでに小学校の授業で水墨画の指導経験があり、彼の計画統括のもとに実施することとなった。また表装の実技に関しては、菊屋の知り合いでもあり、すでに他の講座などで簡易表装の講義を経験されている表具師の金本利雄氏（山口市後河原在住）に依頼することとなった。そしてこのワークショップのタイトルとして、互いに案を出し合った結果、「挑戦！　禅日本墨絵選手権」とすることに決まった。

2　準備と学習（とくにセルフガイドの作成）

ワークショップの実施が決定した後、関係各位への挨拶と依頼を行った。まず山口県立美術館については、「山口・まち・大学」運営委員会の委員長でである山口商工会議所の嶋田日出夫氏と事務局の末永光正氏に同行する形で、上野孝明館長に直接挨拶と依頼をした。また、展覧会担当の学芸員であった福島恒徳氏（現花園大学文学部講師）にワークショップ実施にあたっての事前の展覧会内容に関するレクチャーと指導をお願いした。そして実施にいたるまでの日程についての、調整と段取りを相談した。さらにメンバーの院生１名とともに表装の実技の指導をお願いする金本氏に会い、日程と材料等の相談を行った。材料に関しては表装裂、金具、掛緒など一般では調達しにくいものが多く、基本的には金本氏に一任することとなり、材料実費として参加者各自から２,000円ほど徴収することなどを決めた。

こうして関係者への依頼と打ち合わせを済ませた段階で、実施までの日程を計画した表を作成した（表１）。ワークショップの実施は、福島氏との話し合いの結果、けっきょく展覧会の閉幕の前日にあたる11月22日とした。これは、展覧会の宣伝という意味から、会期のなるべく早いうちに行いたいという美術館側の意向もあったものの、実際セルフガイドなどを作成する院生たちが、やはりじっくり実作品を見てから作業にとりかかるべきだとの判断から、その作業日程を勘案した上での、ぎりぎりの開催日の設定であった。日程のおおまかな流れは、まず院生たちに室町期の水墨画の流れや歴史を知ってもらうためにも、

今回の展覧会の内容に関連した少し専門的な事柄にふれる講義を、筆者が担当して３回ほど行うこととした。そして展覧会開会直後に、担当の福島氏による作品の熟覧と解説をしてもらい、それらをもとにしてセルフガイドの原案の作成にとりかかり、原案が出揃った段階で、その内容の検討と構成について議論することとした。またその間に、美術館で展覧会に関連した講演会とシンポジウムが開かれるのでこれを聴講し(4)、セルフガイド作成の参考にしつつ、原案がほぼ完成した段階で、担当の福島氏にチェックをしてもらい、了解が得られれば印刷にとりかかるという段取りとなった。一方の実技講座に関しては、金本氏に揃えていただくもの以外の材料や道具の手配をセルフガイド作成と同時進行で行い、実施の10日前に金本氏と再度打ち合わせと確認をすることとした。

展覧会の内容は、室町時代の仏画に焦点をあてたものとはいいながら、そのなかでもとくに14世紀後半から15世紀前半に活躍した画僧、明兆の画業をクローズアップしたものであり、さらに明兆に先行する鎌倉末期から南北朝時代の画僧として良全、明兆の弟子筋とみられる霊彩、赤脚子、一之といった京都の東福寺周辺で活躍した仏絵師たちの画系に焦点をあてたものであった。こうした室町期を中心に東福寺画系だけに焦点をしぼった展覧会は、全国でも初めての試みであり、重要文化財10件をふくむ出品作品50件余りの内容は、室町仏画を代表する作品もありながらもけっして単なる名品展ではなく、きわめて学術性の高いものであり、全国の中世絵画史の研究者たちからも熱い注目を集めた企画展であった。しかしそれだけに、何も知らない子供たちにこれらの作品をどのように鑑賞させるのか。どのように展覧会の中味を楽しんでもらうのか。院生たちの短期間の集中的な勉強、さらにそれらの成果を土台とした創意とアイデアを、このワークショップで思い切り発揮してもらうことを期待しつつも、それがどれだけ効果的に実施できるかどうかについては全くの未知数であった。

筆者はもともと近世、近・現代絵画史が研究領域で、今回の展覧会の対象となる中世絵画史の専門ではないが、先述のように展覧会開会後の福島氏の解説へつなげるための室町絵画史の概説と導入の意味を含めた講義を３回に分けて実施した。それらの内容は以下のとおりである。

①室町水墨画の流れ

中国の宋元画の概観と禅林における絵画の特色について解説し、日本に移入された水墨画形式について、とりわけ鎌倉・南北朝時代の初期水墨画から、室町末期における日本独特の水墨画形式の発達とその流れについて概説。

②室町水墨画の画系

今回の東福寺画系をはじめとして、相国寺画系、大徳寺画系、鎌倉の画系、同朋衆の画系というように各画系の流れと内容について概説。

③室町水墨画の画家たち

明兆、周文、雪舟、雪村ら室町水墨画を代表する画家たちの画業と、その作品について概説。

こうした経緯を経た上で、10月23日にいよいよ展覧会が開会され、その翌日に院生たちは展覧会を熟覧することとなった。

見学会においては、福島氏のきわめて熱心な解説を受けた。出品作品１点ごとにその作品の成り立ち、描法、技法、さらに図像解釈にいたるまで、詳細に説明してもらい、院生たちからも熱心な質問が飛び交った。こうしたやりとりは、美術館閉館時間以後にも及び、

けっきょくおよそ半日ほど担当の福島氏を拘束してしまう結果となってしまった。

講義や解説を一通り終え、展覧会出品作品もじっくり見学できたものの、それからおよそ一ヶ月足らずでセルフガイドを仕上げなければならないわけである。そこでセルフガイド作成の上での基本となるその方向性と内容を全員で確認し合った。

方向性

・作品にまつわる歴史的、技術的な知識を伝える。
・単なる知識や情報を伝えるだけでなく、作品自体をよく見ることを促すものとする。
・作品をより深く見るためのきっかけづくりの工夫をする。
　　（例）発見、探索、比較、推理、想像、……等。

内容

ふたりの小坊主が案内役として、対話しながらいろいろなクイズ形式の問題に挑戦していく。

このおおまかな原則のもと、各人が１週間後に原案を具体的な見開きページの形でラフなスケッチとして描いてくることとした。

また水墨画の実技に関しても、以下のような原則を確認し、計画統括の菅野氏が実施案を作成することとなった。

方向性

・基本的な墨や筆の使い方、その効果の表われ方を知る。
・墨の線や面の性質を知る。
・墨の表現による自らのイメージのひろがりや創意なども生かす。

内容

展示作品のできるだけ大きなコピーを用意し、それを模写してみる。また模写したものを組み合わせたり、自由に描きたいものを描いたりすることも可能とする。

こうしてセルフガイドに関しては、１週間後にそれぞれが自らの想像力を働かせながら構想したラフな原案が出来上がってきた。（図１）（図２）は、そのなかの二例である。これらにはアイデアの重複が当然出てくると思っていたところが、それぞれ提出された案の中味にほとんど重複はみられず、どれもきわめてユニークで面白いものであった。そしてこれら原案の内容、言葉、構成を全員で検討チェックしながら、修正を施し、よりしっかりした内容をもつ原案へと固めていった。このようにして出揃った原案を、まとめた形で福島氏に最終的なチェックと指導を受け、いよいよデザインと印刷という段階になった。ここでイラストレーターを使ってデザインできる院生（高山尚子氏）に、ほぼ１週間でデザインから印刷までをこなしてもらうという離れ業をやってもらった。この時、当時山口大学教育学部助教授の吉光純也氏（現山口市企画財政部参事）に全面的な指導と協力をいただいた。

出来上がったセルフガイドが、（図３）から（図10）に示したものである。その内容は次のとおりである。

（図４）　明兆の比較的初期の著色濃彩の「五百羅漢図」と、晩年作とみられる水墨中心の「白衣観音図」を比較し、著彩画と墨画との明るさや受ける印象のちがいについて考えさせる。

（図５）　明兆の自画像を見て、その制作の背景を知り、さらに描かれる材料のちがい（紙本と絹本）を意識させる。またこの作品が江戸期の模写と考えられるため、その材質的な新しさにも気づかせる。

（図６）　描かれる神仏と、それに付随する動物たちの存在に注目させる内容。ここでは文殊と獅子、普賢と象、寿老と鹿、白衣観音と龍というような典型を示した。

（図７）　出品された多くの「白衣観音図」のなかから、明兆、霊彩、良全、赤脚子の作品それぞれの顔貌部分を拡大し、同じ画題における絵師の描き方のちがいについて考えさせる。

（図８）　同じ「白衣観音図」でも、そのポーズのちがいによってバリエーションが多彩にあることを知り、そうしたバリエーションが生まれた意味も知るようにさせる。

（図９）　午後の実技にも関連した表装のしくみ、その保存や飾り方を知り、また絵具で描かれた表装（描き表装）の存在も知るようにさせる。

（図10）　作品に描かれる円相の存在に気づかせ、その意味やイメージを考えさせる。

これらはいずれも院生たちが自らの発案で、創り上げた問題である。展覧会の内容をふまえ、彼らが興味を抱いた事柄について、子供たちがいかに同じように興味をもってくれるかを考えつつ、想を練ったものである。この想をまとめる上で、彼らは講演やシンポジウムも熱心に聴講し、図録論文なども熟読したのだった。つまり彼らは、セルフガイド作成のための事前学習と実作品の調査、熟覧、さらには各人独自の案作成を通して、おそらく今までに鑑賞したどの展覧会よりも深く、そして主体的にこの「禅寺の絵師たち」展に関わったといえるだろう。

３　ワークショップ（挑戦！禅日本墨絵選手権）の実施

①セルフガイド〔10：00～12：00〕

ワークショップ実施当日、朝の10時に集合し、まず主催の商工会議所、次に指導の菊屋（筆者）が挨拶した後、企画の院生たちから一日のスケジュールと午前中のセルフガイドを使ったワークショップの説明を行った。当日の参加者は、小学生５名、中学生５名、大人６名の計16名であった。

一通りのオリエンテーションが終わった後、早速参加者たちは会場に散って、展覧会を鑑賞しながらセルフガイドに取り組み始めた。（写真１）　このセルフガイドによる鑑賞時間をおよそ40分ほどとした。この間、参加者たちはかなりの集中力で、セルフガイドに挑戦したようだった。ただ、参加者のなかでも中学生と小学校低学年では、やはりその鑑賞のスピードにはかなり差があったようであり、この40分という鑑賞時間の設定は全体的にみても少なく、もう少し余裕をみるべきだったようだ。しかし小学校低学年の子供たちも、同伴の親と会話しながらセルフガイドに取り組んでいた。この間、院生たちも会場内に散らばって子供たちの質問やアドバイスを受けるようにしたが、実質は院生たちから子供たちに話しかけない限り、子供たちからのアプローチはほとんどなかった。

40分後に再び参加者には展覧会場入口に集まってもらい、担当の福島氏にセルフガイド

を片手に持ち、その内容に触れながら12時までのこれもおよそ40分間、出品作品の解説をしてもらった。ここでも参加の子供たちが進んで発言や質問をするところまではなかなかいかなかったものの、彼らはすでにセルフガイドを通じてかなりじっくりと作品を見ていた関係もあって、福島氏との会話に対する反応や、説明に対する聞き方は、皆大変熱心であったといえる。(写真２)　ワークショップ終了後のアンケートでも、セルフガイドをやった後で説明を聞くのと、なにもやらずに聞くのとでは、どちらがよかったかの質問に対して、ほぼ全員の参加者が、セルフガイドをやった後の方がよかったとの回答であった。

②実技講座（水墨画に挑戦しよう）〔13：00～15：00〕

まず担当の院生に、午後の講座の内容と流れについて説明をしてもらった。使用した墨は、墨汁を「濃いもの」、「中ぐらいのもの」、「うすいもの」の三段階に分けて水で薄めたもので、これは前もって用意した。また、水墨画が完成後に自らの落款として画面に捺す印章を、発泡スチロールにボールペンで掘り込むように名前を書き、それを木切れに貼って作成することとした。こうしたアイデアは、すでに小学校の現場で墨絵の指導をした経験がある現職派遣院生の菅野氏による発案であった。

説明を終えると、早速奉書紙を配り、墨絵の実技に入った（写真３)。出品作品のうち比較的単純な構図をもつものを展覧会図録から選び、それを拡大コピーしたものを20部ほど作っておいた。参加者たちは、それらのコピーを見ながら模写する者（写真４)、自由に自らの発想で描く者（写真５）など、それぞれの思い思いに水墨画を描くことを楽しんだ。描き終えた水墨作品には、先述のごとく作成された印章が落款として画面に捺された。水墨の白黒の画面に、赤い朱肉で捺された印章が入るだけで、絵全体がぐっとしまり、いかにも水墨作品という雰囲気がにわかに出てくるのは不思議なことであった。

③実技講座（簡易表装）〔15：00～17：00〕

ワークショップの最後は、表具師の金本氏の指導による水墨作品の簡易表装の実習である。金本氏には、本来ならば数週間かかる表装を、２時間で完成できるような形でということで、無理なお願いをした。そうした関係上、材料については金本氏に随分下準備をさせてしまうこととなった。もう少し早い段階から打ち合わせや材料の調達ができていれば、院生たちが、かなり下準備に関わることができたはずである。軸木（上部の八双用半月形軸棒、下部の丸軸棒)、軸ひも（掛緒)、軸ひも用の環、裏打ちをした表装裂（天、地、中廻し〈柱〉、一文字用）など、たしかに素人には調達できないものもあるが、少なくともそれら材料を使えるようにするための作業には、院生たちは関わることができたはずであった。

とにかく、それらの材料はすでに貼り合せたり、取り付けたりするだけの段階にまで用意してもらっていた。これらの材料を以下の１～８の工程に従って表装へと仕立てていった。

1　丸形の軸棒の両端に墨を塗る。
2　本紙の上下に一文字を貼り付ける。両端を切る。(糊しろは３～４ミリくらい)
3　柱を切る。両端を切る。
4　天地をつける。柱の両端にそって切る。
5　軸の上部に半月形の八双をつける。
6　軸の下部に丸形の軸棒をつける。
7　八双に環をつける。

8　軸ひも（掛緒）をつける。

これらの工程のひとつひとつを、まず金本氏が実演しながら説明しては、各人がこなし、次の工程へ移るというやり方で進められた。参加者は工程の実演のその都度、金本氏の作業の手つきを真剣に見つめ（写真６）、そしてやがて完成へと近づいていった。自らが描いた水墨画が美しく表装されて仕上がっていくにつれ、参加者の顔にも自然と満足そうな笑みがこぼれていった。（写真７）　こうして金本氏の段取りの良い進行と、手際の良い解説指導によって、少々遅れ気味の参加者はいたものの、ほぼ予定の17時すぎには全員が表装までを完了することができた。

完成したワークショップ参加者たちの水墨画の掛軸は、今回の事務局である商工会議所のスタッフに預け、後日商店街アーケードの空き店舗スペースで展示会が開催され、山口の商店街を行き交う人々の目に触れることとなった。（写真８）

4　まとめとして

このたび作成したセルフガイドを回収して、それらを分析することはできなかったが、ワークショップ終了後の参加者へのアンケートでは、おおむねセルフガイドは、難しすぎず、やさしすぎず、ちょうどよかったというものが多かった。ただ今回参加者のうち最年少であった小学校２年生の女の子は、問題はむずかしかったと率直に答えていて、やはり小学校低学年にとっては内容の上からもいささか無理があったようだ。とはいうものの、その同伴の母親の感想は「子供と一緒に展覧会を楽しみ、墨絵もりっぱに完成したという充実感を味わいました」と、きわめて反応は良かった。

ワークショップ終了後、日を改めて企画に関わった院生たちとともに、反省会を開き、また彼らにレポートを提出させた。彼らの反省点としてあがったものを要約すると、次の３点であった。

①受講対象の幅が広すぎ、内容が小学校低学年にはさすがに難しすぎた。

②内容を盛り込みすぎて、時間に追われるような形であった。ほぼ１日かける受講は、かなりつらかったのでは。（参加者が少なかったのもそのためではないか）

③企画の段階から、学校なり現場教師なりの協力を得ることが必要だったのではないか。

①については、やはり小学校低学年と、小学校高学年、中学生との間には作品の内容理解の上では大きな隔たりがあることを実感したワークショップであった。子供の発達実態を考慮した時、小学校の低・中学年と高学年では、段階的な差異が存在し、鑑賞指導の独立的展開も高学年からの方が望ましいという指摘も十分うなずけることを実感した次第である。[5]　②に関しては、鑑賞と表現を連関した内容ということで、一連のまとまったワークショップとして実施をめざしたため、けっきょくかなりの時間を要する形となってしまった。時間的な余裕が許せば、本来は内容的にも２日ほどかけるべき質をもったワークショップであったといえる。③については、内容の検討の上からも、参加者を募る上からも必要なことであっただろう。これは、今回だけでなく、日頃の大学、学校、美術館、地域など、それぞれ相互の結びつきの問題でもあり、このネットワークこそが体験学習や地域教育の基盤になりうるものであるだろう。

また今回のワークショップは、古絵画という素材を使ったのであるが、そこに描かれる図像は具体的なものであり、近・現代美術のように画面のなかに抽象的概念を読み取るようなケースは、少なかったといえる。ニューヨーク近代美術館で1984年から96年まで教育

部講師として教育的事業に携わったアメリア・アレナスは、現代アートを楽しむ上では美術に関する特別な知識は必要ないとして、鑑賞者との対話を基本とする美術鑑賞の新しい方法論を紹介した。[6] この方法論は、基本的には古美術鑑賞においてもしっかり適用できるものだと考える。ただ現代アートなどの場合とはまた異なった、たとえば歴史的なあるいは宗教的な図像の表し方、約束事、それらのバリエーションなどといった古美術特有の視覚言語や文法が存在することもたしかである。これらを理解した上で、当時の時代背景や作品制作の背景、あるいは画家たちが育ち、活動した環境などについて、より正確な形で自らのイメージを膨らませることは可能であるだろう。このことは単なる知識の享受だけの受動的な姿勢ではない、正確な情報と美的なイメージ形成が連動したきわめて能動的で創造的な行為であるといえよう。そしてそこで大切なのがその情報の与えられ方であり、その情報を与えられた子供たちがなにを発見し、なにをイメージするかを常に考えながら、それらの選択とそれらを与えるタイミングが十分に吟味されなければならない。これが1980年代以降のアメリカの美術教育におけるいわゆるDBAE（discipline-based art education）の基本的な考え方ともいえるだろう。[7]

こうした見ることと知ることが連動した鑑賞体験のきっかけとして、今回のようなセルフガイドが大いに役立つものと考える。ただこのセルフガイドを使ったワークショップも、あくまでそれをもとに展開されるしっかりとした解説と、対話によって最終的に完成されるものである。しかし今回は、この部分については完全に展覧会を企画した専門の学芸員に任せてしまったわけで、ここでの最終的な解説と対話を経験することが、学生たちにとって最も刺激的で効果的であったのかもしれない。ただそのためには、かなりのレベルの知識と、十分な話し方のトレーニングが必要であり、短期間での学習ではきわめて困難なことである。こうした十分な時間と労力を要求される実践学習についての可能性の模索も、これからの大学教育のカリキュラム検討の大きな課題といえるだろう。

教育課程審議会が平成10年７月に出した答申をもとに、小・中学校の新しい学習指導要領が改訂され、そこではその改訂の柱のひとつとして小・中学校ともに鑑賞の重要性が力説された。とりわけ小学校の図画工作においては、鑑賞することと、表現することの関連や一体性が強く説かれたのであった。[8] そうした鑑賞と表現の融合を自然な形で可能とする機会を提供できるものとして、学校教育と美術館教育のいっそうの連携が必要となってきつつあるといえる。学校現場ではできないこと、また美術館だけではむずかしいことを互いに補完し合う関係が新たに構築されようとしているといえるだろう。

その際美術館・博物館は、当然学校教育における正規のカリキュラムや授業との連携をめざすプログラムを用意すべきであるが、その一方で、正規のカリキュラムや授業といういわば団体学習とは別の、児童生徒個人ごとのいわば個別学習の場も提供できなければならない。学校週５日制の完全実施にあっては、ますますその必要性は増してきているといえよう。このたびのワークショップは、まさしく参加者公募の自由選択学習の場であったわけで、したがってその内容は自主的、かつ自己完結的、自己目的的なものを要求されていた。これはまさにリン・Ｄ・ディアーキングが説く、美術館・博物館の重要な機能である自由な学び（Free-Choice Learning）の場としての典型的な活動といえる。今回のワークショップも、参加者たちはすでに水墨画を鑑賞して描いてみようというはっきりとしたモチベーションを持っていたわけで、それゆえあえてそうしたモチベーションを喚起させようとする必要はなかったものの、そのかわり参加者たちに対してディアーキング女史の

いう、個人的・社会文化的に効果的かつ豊富で適切な「記念になる体験」(memorable experiences) をデザインすること[9]が、このワークショップには要求されたのだった。こうした体験を今回のワークショップが参加者たちに提供できたかどうかはわからないが、保護者のアンケートのなかには大学院生たちがこの企画に関わり、その運営を行なったことが大変印象深かったと記されたものもあって、大学がこうした社会教育施設と連携して若い学生たちがその活動の中心となったことの意義を感じ取ってくれた参加者がいたことは、幸いであった。

先述のように大学生や大学院生が授業の一環としてワークシートを作成したり、アーティストとともに現代美術のプロジェクトを企画したり、実習として美術館・博物館での企画や所蔵品整理をアシストするなど、大学教育においても学生たちによる企業や社会への実践活動や教育支援活動をカリキュラムに取り入れるいわゆるインターンシップ制の導入が一般的になりつつある。こうした美術館や企業、あるいは街でのイベントやプロジェクトは、たとえば学校現場などとはまた異なった美術作品と鑑賞者との生の交流の場であり、そこへの学生の参加や協力はまさに彼らにとっての貴重な体験学習の場となりうるものである。大学、社会教育施設、学校、街との相互の連携と、そこに生まれる学びの場の共同活用は、これからさらに積極的に工夫、模索されるべきだと考える。

注

(1) この活動は現在も継続されて、平成13年度からは「山口街なか大学」という名称で、山口市の事業となり、主催はその事業の委託を受けた山口街なか大学実行委員会となって運営されている。

(2) 近年における日本の古美術を対象としたワークショップの実践を報告した論文としては、鈴木みどり「平成13年度　こどもミュージアム「天神さまってどんな人？」実施報告」(『ミュージアム（東京国立博物館研究誌)』第576号、平成14年6月）がある。

(3) 実際に学生にセルフガイドを作らせるという試みは、実際にそれらが美術館・博物館の現場で使用されたわけではないが、東京学芸大学の水田徹教授による指導のもと、すでに大学の授業の一環として実施している例がある。(水田徹「大学生による小・中学生のための複製美術展」『ミュージアムマガジン　ドーム』第2号、日本文教出版、平成4年6月)、また宇都宮美術館では、宇都宮大学の大学院生たちが大学院の授業の一環として中学生を対象としたワークシートの作成に携わり、実際にそれらを市内の小・中学校に配布したり、美術館においても展示室に置き、一般来館者に利用してもらったりしたという報告もある。(『全国美術館会議　第15回学芸員研修会報告書「美術館・教育普及の可能性」』(全国美術館会議事務局教育普及ワーキンググループ、平成12年11月）における「鑑賞」分科会での報告、pp.74～75)

(4) この会期中（11月8日）に開催された記念講演会・シンポジウムは、講演会は有賀祥隆氏（東北大学教授）の「日本の仏画―伝統と革新」、平田寛氏（九州大学名誉教授）の「日本の画僧について」、シンポジウムには有賀氏、展覧会担当の福島氏のほか、島尾新氏（東京文化財研究所主任研究官、現多摩美術大学教授)、山下裕二氏（明治学院大学教授）が出席された。

(5) 岡田匡史「鑑賞教育の新しい展開」(『大学美術教育学会誌』第27号、大学美術教育学会、平成7年3月）では、小学校児童の鑑賞能力の一般的傾向として、低・中学年の主

観的解釈の段階から高学年の論理的思考を軸とする知的理解の段階への発達が認められ、それゆえに鑑賞指導の独立的展開は高学年で実施するのが良いと説いている。

(6) このアメリア・アレナスの鑑賞テクニックと鑑賞教育に関する考え方を紹介する著書として『なぜ、これがアートなの？』（福のり子訳、淡交社、平成10年２月）が出版された後、『人はなぜ、傑作に夢中になるの』（木下哲夫訳、淡交社、平成11年９月）、『みる・かんがえる・はなす』（木下哲夫訳、淡交社、平成13年３月）、『まなざしの共有』（上野行一監修、淡交社、平成13年３月）と矢継ぎ早に近年続刊が刊行され続けている。

(7) このDBAEについての紹介としては、山木朝彦「アメリカの美術教育とDBAE」（『美術手帖』第770号、美術出版社、平成11年５月）がある。

(8) 『小学校学習指導要領解説　図画工作編』（文部省、日本文教出版、平成11年５月）

(9) 国立民族学博物館の主催による博物館教育国際シンポジウム「自由な学びを支援するには～英米の博物館事例に探る～」（於国立民族学博物館、平成14年１月20日）におけるリン・D・ディアーキング（Lynn D. Dierking, PhD.）による講演「自由な学びによる博物館利用―来館者の経験と意味付け―」（Using Museum for Free-Choice Learning: Visitor Experiences and the Making of Meaning）のなかで説かれた博物館（美術館）における３つの目標のひとつ。

謝辞

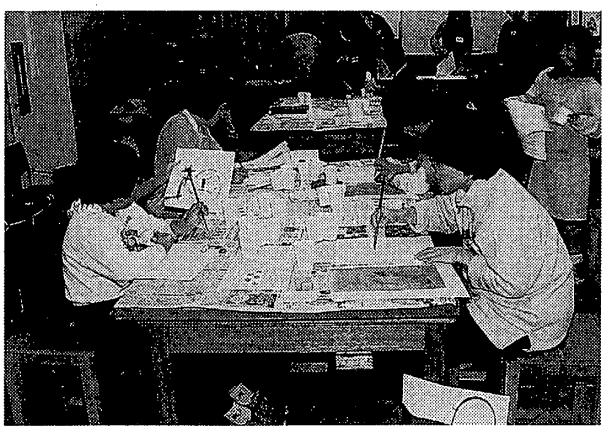
本論のベースとなったワークショップの実施にあたっては、多くの方々の協力を得ました。素材としての展覧会の内容を提供、指導していただいた山口県立美術館長の上野孝明、学芸員の福島恒徳（現花園大学講師）の両氏、表装の指導していただいた金本利雄氏、ワークショップの事務局としてご尽力いただいた山口商工会議所の嶋田日出夫、末永光正、木下志のぶの各氏、セルフガイドの作成を指導していただいた吉光純也氏（現山口市企画財政部参事）、この企画への中学生の参加を促していただいた当時山口大学附属山口中学校教諭の高下正明氏（現鹿野町立鹿野中学校）、そしてワークショップを実際に企画実施した菅野雅人（現下関市立向井小学校）、原田万智子（現秋芳町立秋芳北中学校）、難波章人、高山尚子、笈木貴子、福田美穂子、松尾真里の当時山口大学教育学部美術教育専修１年の各氏に対して心より感謝いたします。

（表１）
ワークショップ（挑戦！　禅日本墨絵選手権）実施計画日程

月　日	セルフガイド	実技講座（水墨画、表装）
10/ 8(木) 10/15(木) 10/22(木) 10/23(金) 10/24(土)	講義（室町水墨画の流れ）および打ち合わせ 講義（室町水墨画の画系）および打ち合わせ 講義（室町水墨画の画家たち）および打ち合わせ 禅寺の絵師展開会（～11月23日） 美術館での展覧会調査および作品解説を受講	
10/29(木) 11/ 5(木)	セルフガイド原案の作成 セルフガイド原案持ち寄り、内容を検討	材料、道具等の手配
11/ 8(日)	講演会・シンポジウム（山口県立美術館）を聴講	
11/12(木) 11/19(木)	セルフガイド原案完成 美術館学芸員の指導 セルフガイド完成 実施最終打ち合わせ	金本氏（表具師）と打ち合わせ アンケート作成 材料、道具等の確認 実施最終打ち合わせ
11/22(日)	ワークショップ実施（10:00～17:00）	

（写真１）

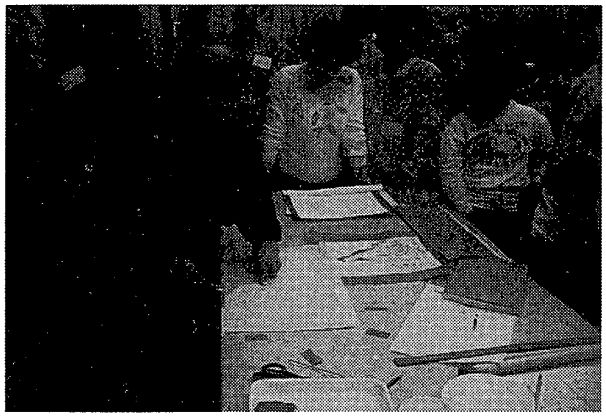
（写真２）



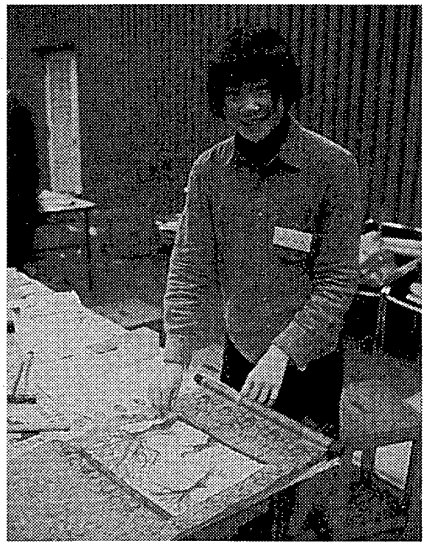
（写真３）

（写真４）

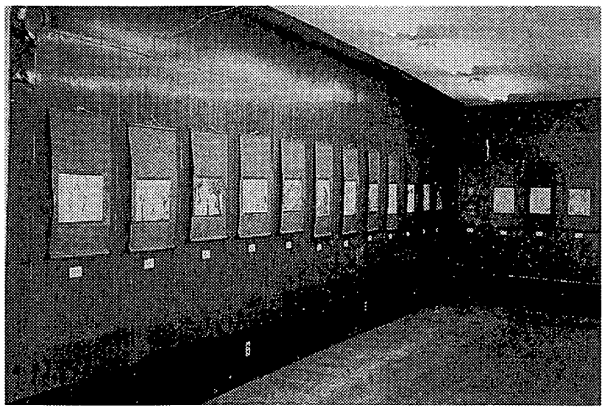
（写真５）



（写真６）

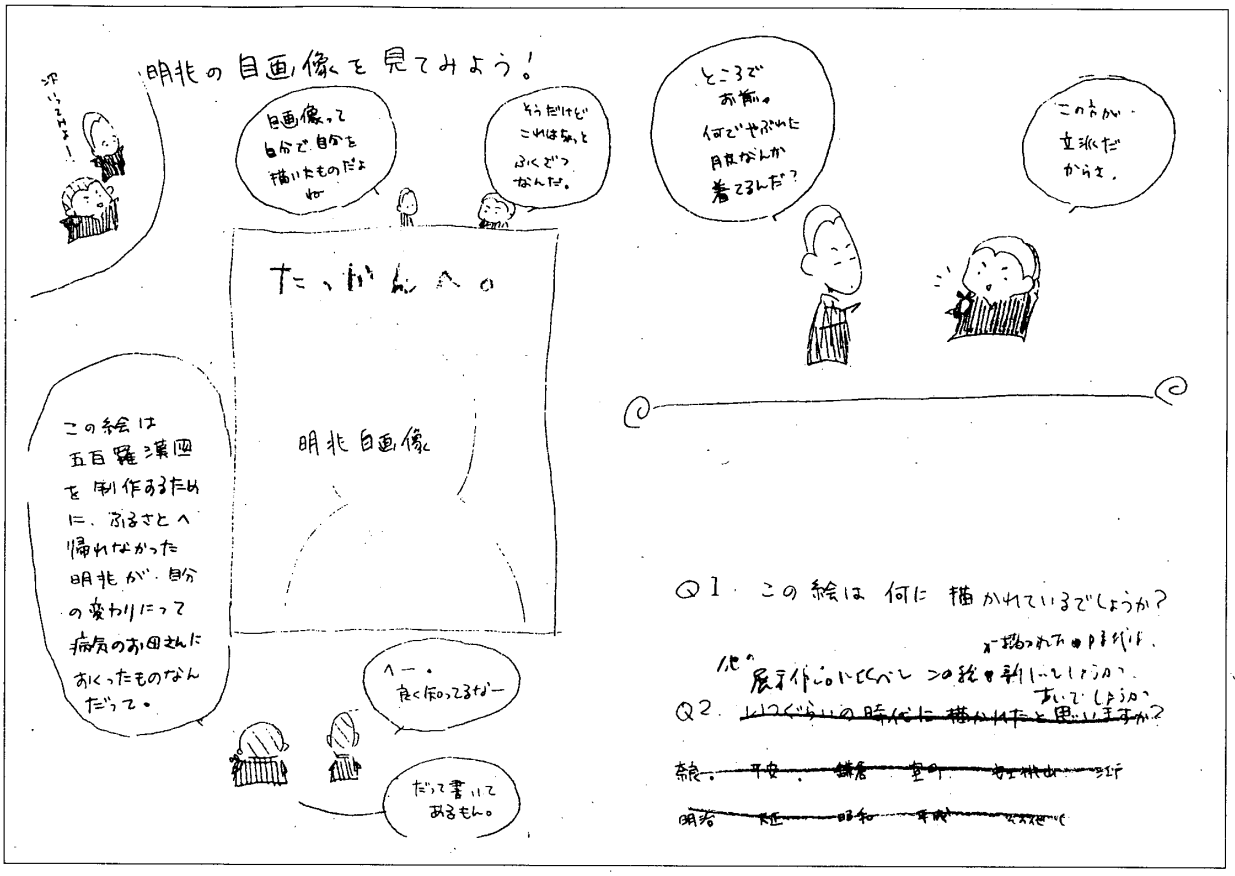


（写真７）

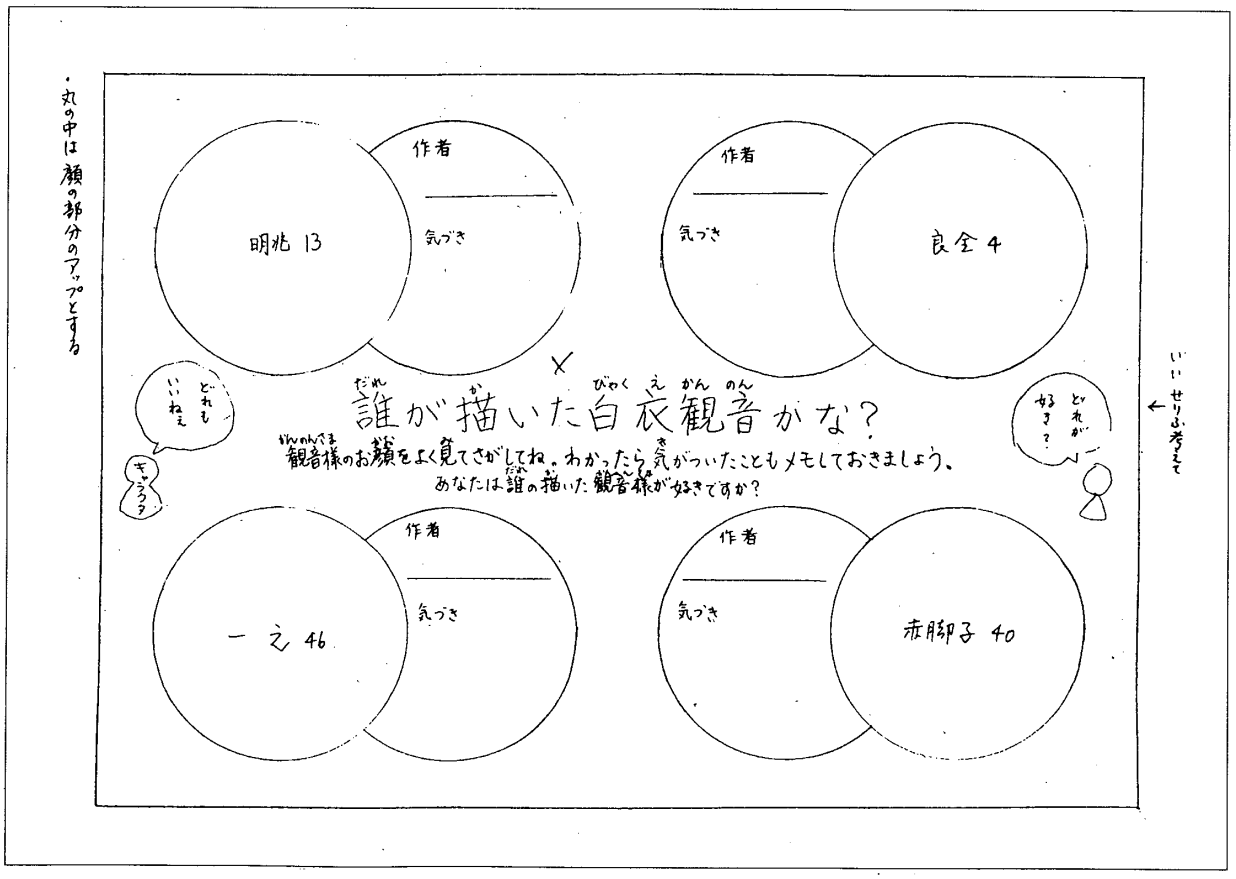


（写真８）

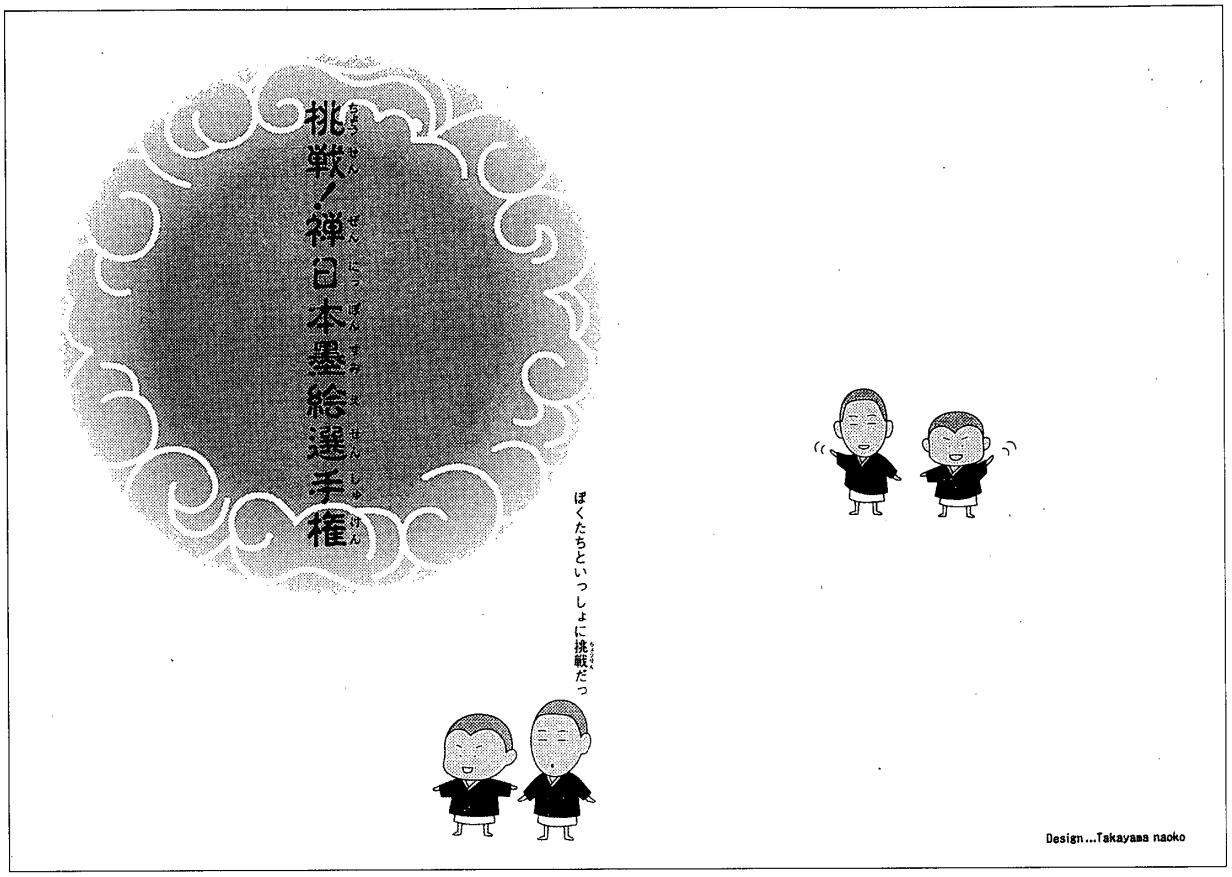
（図１）


明兆の自画像を見てみよう！
ジャンケンポン！
自画像って自分で自分を描いたものだよね
そうだけどこれはなんとふくどっなんだ。
ところでお前の何でやぶれた月代なんか着てるんだ？
この方が立派だからさ。
たっかんへの
明兆自画像
この絵は五百羅漢図を制作するために、ふるさとへ帰れなかった明兆が、自分の変わりにって病気のお母さんにおくったものなんだって。
へー。良く知ってるなー
だって書いてあるもん。
Q1 この絵は何に描かれているでしょうか？
Q2 いつぐらいの時代に描かれたと思いますか？
奈良 平安 鎌倉 室町 安土桃山 江戸
明治 大正 昭和 平成 令和

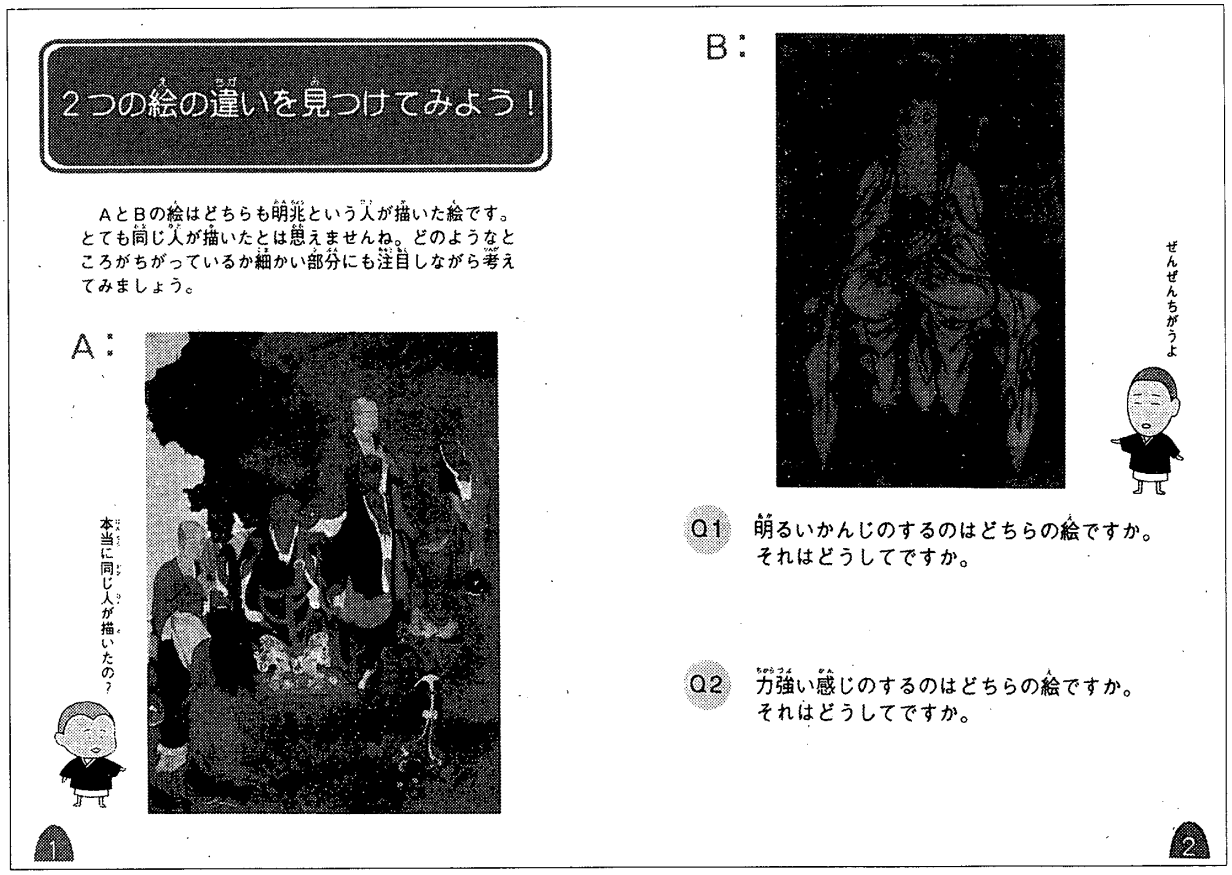
（図２）


・丸の中は顔の部分のアップとする
明兆 13
作者
気づき
良全 4
作者
気づき
誰が描いた白衣観音かな？
観音様のお顔をよく見てさがしてね。わかったら気がついたこともメモしておきましょう。
あなたは誰の描いた観音様が好きですか？
どれもいいねえ
キョロロ
どれが好き？
いいせりふ考えて
一之 46
作者
気づき
赤脚子 40
作者
気づき

（図３）表・裏表紙


挑戦！禅日本墨絵選手権
ぼくたちといっしょに挑戦だっ
Design...Takayama naoko

（図４）


２つの絵の違いを見つけてみよう！
ＡとＢの絵はどちらも明兆という人が描いた絵です。とても同じ人が描いたとは思えませんね。どのようなところがちがっているか細かい部分にも注目しながら考えてみましょう。
A：
本当に同じ人が描いたの？
B：
ぜんぜんちがうよ
Q1 明るいかんじのするのはどちらの絵ですか。それはどうしてですか。
Q2 力強い感じのするのはどちらの絵ですか。それはどうしてですか。
1
2

（図５）

明兆の自画像を見てみよう！

自画像って自分で自分を描いたものだよね！

そうだけどこれはちょっとふくざつなんだ。

：この絵は五百羅漢図をつくるために、ふるさとへ帰れなかった明兆が自分の代わりにって病気のお母さんにおくったものなんだって。

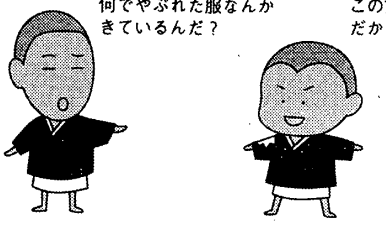
：へー。よく知ってるな。

：だって書いてあるもん！

3

ところでおまえ。何でやぶれた服なんかきているんだ？

この方がりっぱだからさっ！



Q1 この絵は何に描かれているでしょうか？

Q2 この絵が描かれた時代は、他の展示作品にくらべて新しいでしょうか？古いでしょうか？

4

（図６）

動物がわかるかな？

あなたの好きな動物は何ですか？
それを絵に描いてみましょう。

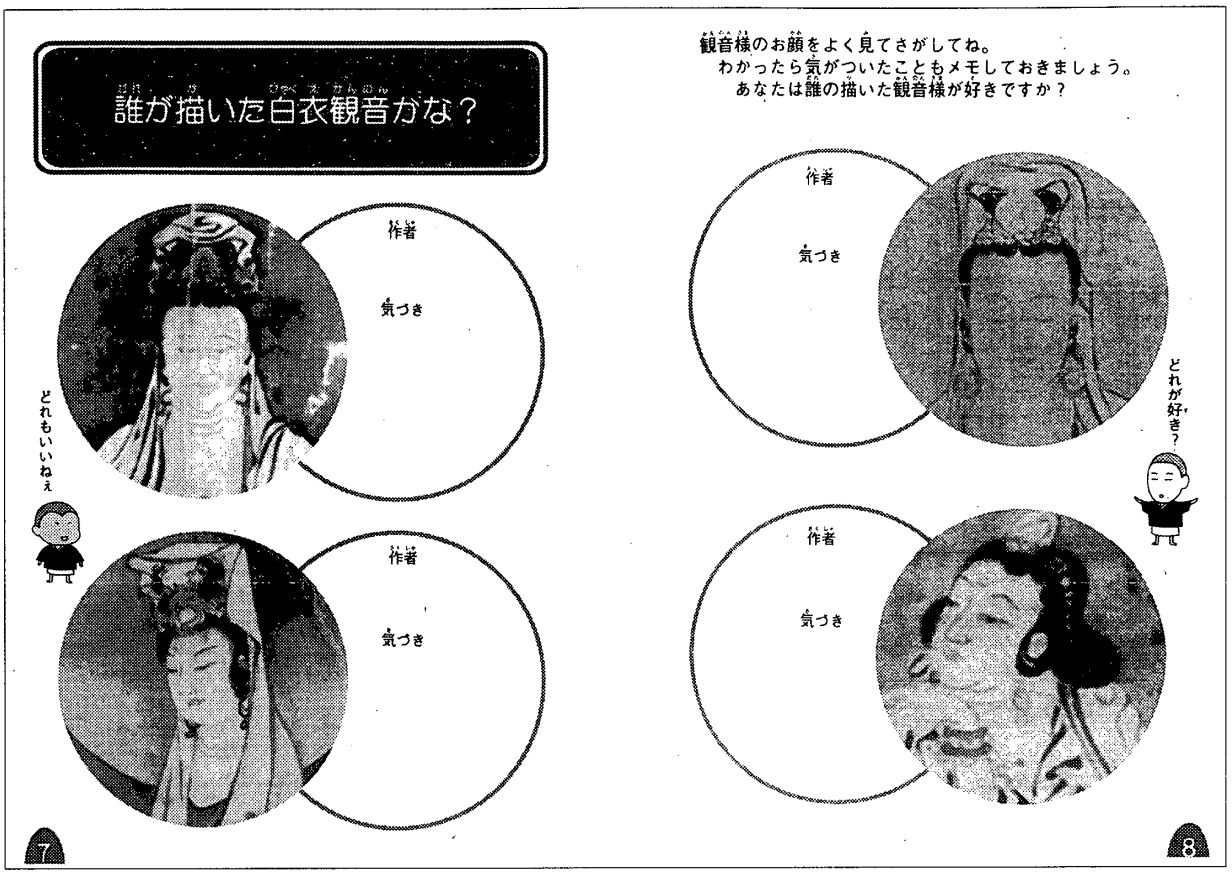
展示されている作品の中に、どんな動物が描いてあるかさがしてみよう！

5

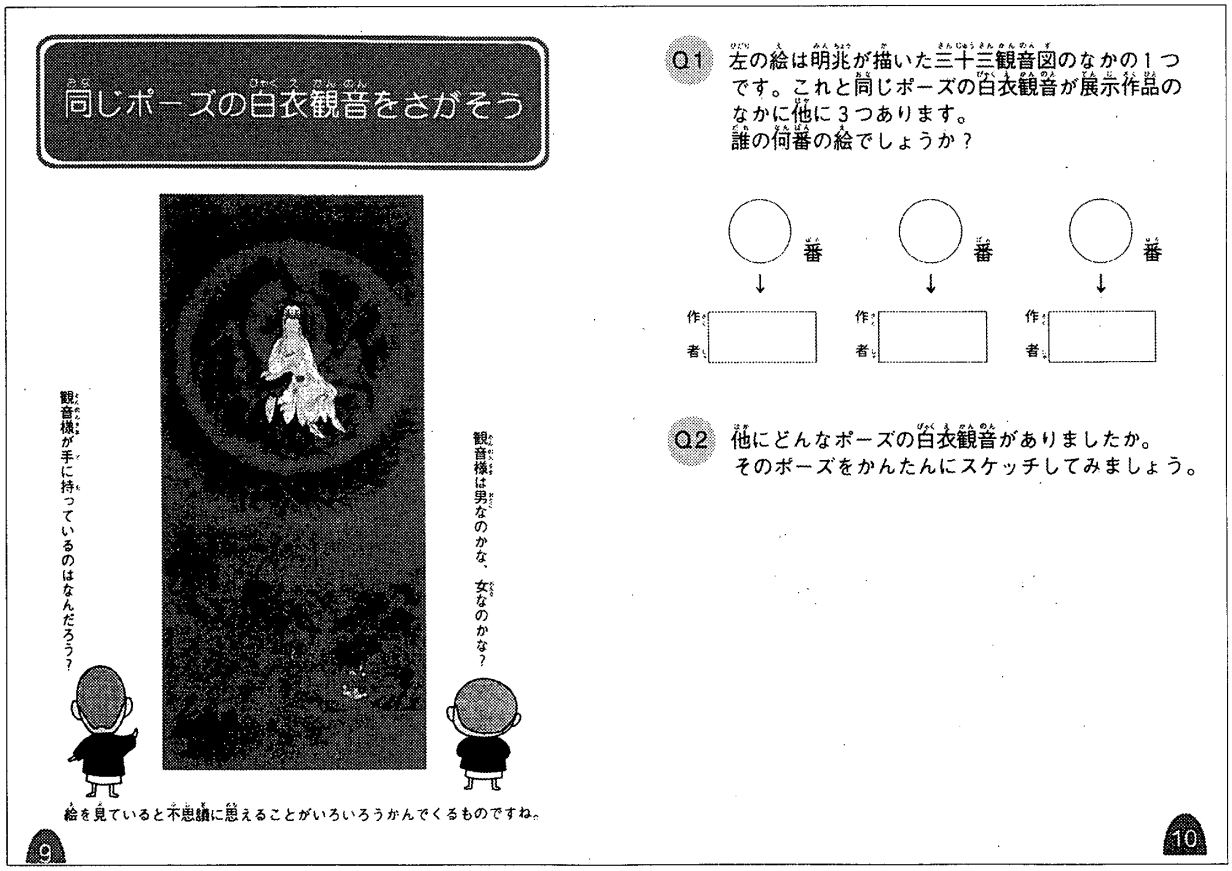
同じ絵の中に描かれているもどうしを線でむすんでみよう。

6

（図７）


誰が描いた白衣観音かな？
作者
気づき
どれもいいねぇ
作者
気づき
7
観音様のお顔をよく見てさがしてね。
わかったら気がついたこともメモしておきましょう。
あなたは誰の描いた観音様が好きですか？
作者
気づき
どれが好き？
作者
気づき
8

（図８）


同じポーズの白衣観音をさがそう
観音様が手に持っているのはなんだろう？
観音様は男なのかな、女なのかな？
絵を見ていると不思議に思えることがいろいろうかんでくるものですね。
9
Q1 左の絵は明兆が描いた三十三観音図のなかの１つです。これと同じポーズの白衣観音が展示作品のなかに他に３つあります。
誰の何番の絵でしょうか？
番
番
番
作者
作者
作者
Q2 他にどんなポーズの白衣観音がありましたか。
そのポーズをかんたんにスケッチしてみましょう。
10

（図９）

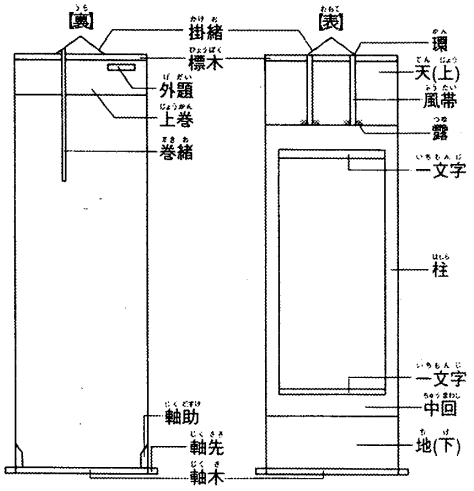
描いてある表装を見つけよう！

：この展覧会の作品は今から500～600年ほど前のものらしいよ。

：どの作品も美しく見ることができるんだね。

：それは表装のおかげなんだって!!

《表装のしくみ》



11

《表装の役割》

！ 作品の保存
・うらに紙をはって強くします。
・作品を巻くことができるので簡単にしまえます。

” 作品の鑑賞
・これらの作品は家のかべなどにつるしてかざります。
そのために作品をつるすためのひもがついています。
・作品がすてきに見えるように、まわりの裂(きれ)の色やもようをくふうしています。

Q1 展示作品の中に１つ"描き表装"といってまわりのかざりなどが、裂(きれ)でなく絵の具で描かれたものがあります。それを見つけて作品の番号をかいてみよう。

○ 番

12

（図10）

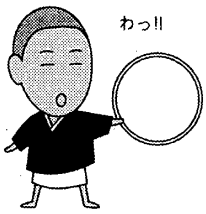
うしろの円はなんだろう？

"円"や"環"には始まりも終わりもなく"無限"を意味し、完全なものというイメージがあるんだって。

13

Q1 絵の中の人物像の後ろに描かれている円は何だろう？

Q2 あなたが円の形から連想するものは何ですか？



14